PROCEEDINGS 20 1-10
March 2012

保守運動観点からのジェンダーバッシング言説
―フレーム分析を使用して―

加　藤　晴　乃
（人間発達科学専攻）

1. 問題関心

日本においては1990年代後半以降、ジェンダーフリーや男女共同参画社会等を批判するバッシングが起きており、「男らしさ･女らしさ」を否定しているとの批判、フェミニズムが家庭や国家を崩壊させるとの主張、性教育へのバッシング等がなされている（若桑 2006）。本稿では、このような事象を「ジェンダーバッシング」と定義し、これを1990年代後半から2000年代の日本におけるフェミニズムへのバックラッシュと見なして考察対象とする。

「バックラッシュ」とはもともと「あと戻り」「跳ね返り」という意味だが、Susan　Faludiはこの言葉を著書『バックラッシュ』（Faludi 1991 = 1994）で、女性運動に対抗しようとするあらゆるアンチ・フェミニズムの動きを指すものとして用い、1970年代から一定の進展を見せていたフェミニズムに対して、1980年代にアメリカにおいて現れたさまざまな反動について論じた。

フェミニズム側の分析によれば、ジェンダーバッシングは、保守系の政治家・メディア・有識者によって宣伝され広められている面がある。そのバックに保守系団体の存在が見られ、組織的にジェンダーバッシングが行われていることや、宗教右翼もジェンダーバッシングを広める上で役割を果たしていること等も指摘されている（若桑 2006）。またジェンダーバッシングが政治家やメディア等を通じて相互連関的に広まっていった過程について、竹信三恵子（2005）は「連係プレー」が存在するとして指摘している。

筆者はジェンダーバッシングの言説を保守運動の観点から捉え、バッシングにおいて保守が用いる「草の根」としての自己規定に着目し、フレーム分析を用いて分析した（Kato 2011）。その結果、保守市民が「草の根」を自称し、また政治家やメディア、有識者等が「草の根運動」を要請することによって、フェミニストらの「権力」に対抗するという構図を取ってバッシングを行っている側面が明らかになった。しかし、バッシングにおける保守運動参加者の自己規定の側面については明らかになったが、保守運動参加者がフェミニズム側に対してどのような批判の認識を持ってバッシングを行っているかはまだ明らかにしていない。またバッシング言説全体としてはどのような認識枠組みが表出され、どのような構図でバッシングに動員がなされたのかといった点についてもわかっていない。

本稿では、以上のような問題関心に基づき、保守運動参加者のフェミニズム側に対する批判の認識枠組みと、バッシングの言説レベルでの動員構造を明らかにすることを目的として、バッシング言説を、フレーム分析を用いて分析する。これにより言説水準で現出しているバッシングの広まり方の一端を検討することが可能となり、保守運動としてのジェンダーバッシングの言説全体における動員の構図の一端が明らかになると考える。

2. 先行研究

2.1. ジェンダーバッシングについてのフェミニズム側の分析

フェミニズム側はジェンダーバッシングが起きる社会的背景として、新自由主義の下で生じる不安感や新保守主義の下での伝統的価値観への回帰等を挙げている（浅井 2006; 小山・荻上 2006; 子安 2006; 日本女性学会ジェンダー研究会編 2006等）。またインターネット特有のコミュニケーション様式も原因とされている（海妻 2005; 鈴木 2006）。

ジェンダーバッシングは雑誌や書籍、そしてインターネット等のメディア上で言説が行き交うことによって、個々の発話者の意図や動機をも越えて言説が資源として利用され、流通し広まったという側面がある。しかしこの言説水準で現出しているバッシングを運動としてとらえた研究は、フェミニズム側の分析にはまだ無い。そこで筆者は言説を対象として分析し、言説水準でどのようなバッシングが表出されたかを探ることを試みたい。

2.2. 社会運動論の検討――言説分析を採用するにあたって

野宮大志郎は運動論の文化的転回を受けて、「時代の支配的思考様式にたいする発言」（野宮編著 2002: iv）等をも運動と定義している。これを受けて本稿では、言説水準の動きや意識の表明等をも運動として扱いたい。

荻野達史は運動言説を、「分析対象を個人の意識水準ではなく、言説の水準に明確に限定して」、フレーム分析を用い分析している（荻野 2002: 138）。フレーム分析はもともと運動に関わる人々の「意識」に関しても扱うとされている分析法ではあるが（Snow and Benford 1988）、荻野は心理学者 Vivien Burr（1995 = 1997）を参照しながら、運動が“どう思われるか”を検討するというよりは「運動が“どう語られるか”、より正確には“どう語られることが可能であるか”に注目し」（荻野 2002: 138）て、言説を対象にフレーム分析を行っている。筆者は荻野に倣い、保守運動としてのジェンダーバッシングを、言説水準に焦点を絞って分析することを試みる。荻野が対象としたのはある教育運動について語る言説であり、筆者は言説そのものを運動としてとらえるという点で荻野とは異なる。しかし、「どう思われるか」という意識の水準だけでなく「どう語られるか」という言説の水準に着目したいと考え、この点で荻野の論考に倣い、フレーム分析を用いる。

2.3. 保守運動の先行研究レビュー

近年の日本における保守の運動に対する研究の先駆的なものとしては、村井淳志（1997）が挙げられる。村井は、「自由主義史観研究会」の運動を担った現場教師への聞き取り調査等を行い、近現代史の見直しがなぜ広範な国民や教師の支持を得たのかを探っている。

小熊英二・上野陽子（2003）は村井（1997）を受けて、「新しい歴史教科書をつくる会」周辺の論調分析と、同会神奈川県支部の実地調査を行っている（小熊・上野 2003: 1）。小熊によれば、不安を癒す渇望からナショナリズムに吸引される現象が、現代日本の草の根ナショナリズムの基盤の一部をなしていると推測されている（小熊・上野 2003: 8-9）。

本稿は保守運動の中の「反フェミニズム運動」的側面を対象とし、保守が「反フェミニズム運動」にコミットする際に提示する認識枠組みの一端を言説水準で探ることを試みる。

吉野耕作（1997）は文化ナショナリズムに焦点をあて、「日本人論」について、「生産」する層と「消費」する層について論じている。これに示唆を得て、本稿においては、バッシング言説を「生産」する側の政治家、メディア、有識者等と、それを受容し「消費」する層の両者について、その活動を運動としてとらえて考察したい。

なおインターネットと運動の関係性について、辻大介（2008）は、ネット右翼と呼ばれる層はネットの外でも署名・投書・集会出席などの活動に積極的な傾向が見られると指摘している。また荻上チキ（2009）は、ウェブ上の集合行動である「祭り」を「社会運動」として観察する試みを行っている[1]。本稿においてもインターネット上でもバッシングが広まったことに着目し、インターネット上の掲示板やブログ等も主要な分析対象とする。

3. 分析枠組みと分析対象

3.1. 分析枠組み――フレーム分析

David A. Snow によれば社会運動のフレーム分析におけるフレームとは、「個人にその生活空間や、全体社会の中で起った出来事を位置づけ、知覚し、識別し、ラベルづけすることを可能ならしめる解釈図式」（Snow et al. 1986: 464; 曽良中 2004: 240）である。Snow らはフレームの中でも、運動組織が提示する意味付けの枠組みを集合行為フレームと呼んでいる。参加者を動員するために人々に向かってなされる運動のフレーミング努力が、その人々の中で共感を呼び起すことをフレーム共鳴という（Snow and Benford 1988: 199; 曽良中 2004: 243）。すなわち運動組織が集合行為フレームを形成し、各個人がそのフレームに共鳴したとき運動に動員されるのである。

このような分析枠組みを用いることで、ある認識枠組みのバッシングに共鳴して、そのバッシングに動員される、という言説水準の運動を見ることができると考え、フレーム分析を採用する。

3.2. 分析対象

使用するデータは、雑誌や書籍（林 2005; 西尾・八木 2005; 野村編 2006; 山本編 2006 等）によって刊行されたバッシング言説と、インターネット上のホームページやブログ等において取得したバッシング言説である。

雑誌記事はバッシングの記事を多く掲載していた保守系論壇誌の『諸君！』と『正論』を中心に分析した[2]。「CiNii - NII 論文情報ナビゲータ」で「フェミニズム」「ジェンダーフリー」「男女共同参画社会」等のキーワードで検索、またフェミニズム側からバッシングの主要な論客として見なされている個人名で検索をかけて記事を抽出した。抽出した期間は、1999-2007 年である。検索開始年に関しては、バッシングの発端として目される議会質問が 1998 年 11 月になされた（江原 2007）ことから設定した。

インターネットも主要な分析対象としている。本や雑誌記事に執筆する機会の少ない「一般市民」の声を集めるのに重要なメディアであると判断したからである。また社会

表１ 『正論』と『諸君！』の分析記事件数

	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	計
正論	2	2	0	11	15	11	15	3	1	60
諸君！	0	1	0	3	3	0	3	0	0	10
計	2	3	0	14	18	11	18	3	1	70

運動にとってインターネットというメディアは「運動メディアとして利用しうる特性を有している」（大畑 2004: 169）との指摘がなされており、今後注目すべきであるとの指摘がある。さらにジェンダーバッシングに関しては、書籍が刊行されたり条例に関して議会で活動が行われたりしたにとどまらず、インターネット上でバッシングが流行したという側面がある。以上の理由から、インターネットに着目した。

3.3. 分析の手順と視点

バッシングを行う人を「広める側」と「一般市民」の２つに分けて考える。「広める側」は権威ある情報を伝える手段を持ち政策形成にも影響を与えやすい人である。竹信（2005）が指摘するところのバッシングを広めるプロセスにおける「連携プレー」の担い手であり、集合行為フレームの形成者にあたる。これらの層についてフェミニズム側が「バッシングを広める人」として規定していたことを受け、「広める側」と名付ける。「一般市民」はそれ以外の、大きなメディアを持たず政策形成にも直接的には影響を与えない人々である。小熊・上野（2003）が「新しい歴史教科書をつくる会」神奈川県支部に「普通の市民」の姿が見られたと述べていることを受け、それと類似の層を想定し「一般市民」と名付ける。

吉野（1997）では文化ナショナリズムの「生産者」と「消費者」にあたり同様の層を想定してはいるが、「一般市民」も特にインターネットを利用することにより情報を「消費」するにとどまらず「生産」する側に回ることも容易になると考え、吉野（1997）とは別の名称を付けることとした。中間的な人も存在するが、２つに分けることで、「一般市民」が雑誌等に掲載された政治家や有識者の言説をどう資源として利用しているか見られるのではないかと考え、便宜上この２つに分けて見ていくこととする。なお特にインターネットを媒体とした場合、その発信者が「広める側」なのか「一般市民」なのか「真実」を特定することが困難な場合がある。本稿では、「真実」が特定できる場合はそれに従って発信者を区分するが、「真実」を特定することが困難な場合、自分の肩書きをどのように称しているかに従って区分する。これは、ある言説を目にした人がその発信者の属性についてどう判断するかを重視したいためである。すなわちその発信者が「『誰』であると見られるように発信しているのか」を重視したい。

分析では、バッシング言説で繰り返し現れるテーマを探り、同じように表現する一群のフレーズを探し、バッシングする理由として頻繁に提示される特徴的な語彙を類型化する。そして顕著に見られる認識枠組みを抽出することで、バッシングの各担い手がどのように状況を認識しバッシングを行ったのか、そして各担い手の認識は他の担い手とどう共有され、影響を与えたのかを見る。すなわちバッシングの各アクター間のフレームの共鳴を見ることで、バッシングを「広める側」とされている政治家や有識者と、バッシングを行う「一般市民」の間で、どのようにして同様の言説が流布しているのかを考察する。

Kato（2011）では「草の根」としての自己規定と「反権力」の構図に着目して分析したが、今回バッシング言説全体の動員の構図を概観して改めて分析した結果、バッシング言説全体においては「反フェミニズム」という集合行為フレームが掲げられていた。そして「反フェミニズム」に共鳴する際の詳細な理由となる補助的なフレームとして、「破壊思想」「共産主義」「理論破綻」「反権力」「草の根」の５つのフレームが見られた。前者３つは、フェミニズムを「国家や家庭の破壊を目論む革命の思想である」「共産主義である」「理論的に破綻しているもので有効な概念ではない」として批判するという認識枠組みである。また後者２つは、保守が自らの側を「権力を用いた上からの革命に反対している」「草の根である」としてアイデンティファイする認識である。これらが「フェミニズムに反対する」という認識を形成する際の要因となっていると考えられる。この５種類の認識枠組み以外には、「反フェミニズム」に共鳴する理由となるものはほぼ見られなかった。

反権力フレームと草の根フレームはKato（2011）で詳述したため説明を簡略にする。以下では保守のフェミニズム側に対する批判の認識枠組みである破壊思想フレーム・共産主義フレーム・理論破綻フレームを検討し、併せて言説全体の動員構図を考察する。

4. 分析結果

以下では代表的な事例から各フレームをみていく。それぞれの事例では、各フレームとの共鳴が読み取れる。

4.1. 破壊思想フレーム

「フェミニズム」等は国家や家庭の破壊を目論む思想である、という認識である。

4.1.1.「広める側」のフレーム

基本法はフェミニズム（日本ではジェンダーフリーと言い換えられてきた）、つまり家族破壊を目指す過激なイデオロギー（ユートピア論）を体現したものである。（光原 2005.5: 328）[3]

知人の苦渋を語ったさかもと氏は「これで家庭というものが保っていけるでしょうか。ジェンダーフリー思想は極めて危険な思想です」と結んだ。（山本編 2006: 16）[4]

わが国の教育を壟断し、家庭を破壊し、日本の未来を危うくする元凶ともいうべきものが、男女共同参画社会基本法とその司令塔たる内閣府男女共同参画局です。（桜井 2006.5: 338）[5]

上記の文言からは、男女共同参画社会基本法、フェミニズム、ジェンダーフリーが家族の破壊を目指す思想であるとの認識が読み取れる。

4.1.2.「一般市民」のフレーム

事実婚・別姓を自らが選択した結果である非嫡出子の存在を「生まれてくる子が差別を受けるいわれはない」と、子供の権利擁護のイメージで同情を得ようとするところに特徴があり、直接的に婚姻、家族制度の破壊を推進する意図といえる。（増谷 2004.9: 265）[6]

これらの改正法では、伝統と文化の尊重、規範意識と公共の精神の醸成、家族と家庭の重視などが掲げられています。ジェンダーフリーの思想はこれらの価値観と全く相容れません。（健全な男女共同参画社会をめざす会 2007: 第5段落）[7]

ひな祭りをやり玉に挙げるなど、「男らしさ・女らしさ」を育む文化・伝統を批判するジェンダーフリー思想（富士山 2000 2009: 第2段落）[8]

上記の文言からは、ジェンダーフリー等が文化・伝統や家庭の破壊を推進するとの認識が読み取れる。

4.2. 共産主義フレーム

「フェミニズム」等は共産主義である、という認識である。

4.2.1.「広める側」のフレーム

それはまさに人間の「非合理的な」感情や人間性を否定する唯物論的共産主義そのものである。（林 2002.1: 279）[9]

「家庭科」の教師用指導書の背景にあるものも、明確に“闘争の論理”であり、革命思想であり、マルクス主義に淵源を持つ女性解放論です。（八木・木村 2002: 145）[10]

ジェンダーフリー思想の核心には、フーリエやライヒの流れをくむ共産・革命思想がありますが、ロシア革命や連合赤軍の実践を通してその破綻は明らかになっています。（桜井 2005.11: 330）[11]

上記の文言からは、フェミニズム、女性解放論、ジェンダーフリー等を共産主義であるとして批判する認識が読み取れる。

4.2.2.「一般市民」のフレーム

これ［筆者注：ジェンダーフリー教育］はまさにこれまでの文化を「ブルジョア的」などと呼んで破壊した共産主義国家と同じですね。（ジェンダーフリーってなんか変！ 2012: 第2段落）[12]

なんだか日本のジェンダーフリーは女権拡大運動と共産主義的な思想が混じったとても危険なものに思えてならない。（大和の行く末を憂う凡人のブログ 2005: 第3段落）[13]

ジェンダーフリーの理論的・思想的背景については、社会・共産主義のイデオロギーから来ているといいます。（h0512kazu 2005: 第6段落）[14]

上記の文言からは、ジェンダーフリー教育やジェンダーフリー等が共産主義的な思想から来ている、という認識が読み取れる。

4.3. 理論破綻フレーム

「フェミニズム」等は理論が破綻しているので有効な概念ではない、という認識である。

4.3.1.「広める側」のフレーム

女性学というものがどれほど非科学的なものかということがわかろうというものです。(西尾・八木 2005: 271)[15]

フェミニズムの思想は、第二回で説明したとおり、根拠のない虚偽のテーゼの上に成り立っている。(光原 2005.9: 253)[16]

この理論装置［筆者注：フェミニズム理論］、もっともらしく体系化され、学問的な偽装が施されているので、多くの人々が騙され、家族を軽視したり、軽蔑したりする風潮が蔓延している。(林 2005: 3)[17]

上記の文言からは、女性学が非科学的であるという認識や、あるいはフェミニズムが虚偽であるという認識が読み取れる。

4.3.2.「一般市民」のフレーム

今もなお日本のジェンダーフリー論者は／この破綻したマネー理論を自らの思想の論拠としている。(misaki80sw 2005: 第 68 段落)[18]

非科学的なトンデモ理論（ジェンダー理論）を根底に置いた少子化対策など、まさに笑止千万！（【亡国】恐怖のﾌｪﾐﾆｽﾞﾑ／ｼﾞｪﾝﾀﾞｰﾌﾘｰ【思想】2005: レス番号 124)[19]

政府の第 2 次基本計画、改正教育基本法及び改正教育三法の精神、さらには小児医学や脳科学等の最近の学問水準に基づき、下記の請願事項を基本方針として現行の条例を運用されるよう請願いたします。(健全な男女共同参画社会をめざす会 2007: 第 6 段落)[20]

上記からは、ジェンダーフリーが破綻した理論を論拠としている、非科学的である、あるいは最近の学問水準に基づいていない、といった認識が読み取れる。

4.4. 反権力フレーム

発話者が自らを、権力を用いた上からの革命に反対している存在であるとして見なす認識である[21]。

4.4.1.「広める側」のフレーム

そして今、男女共同参画という革命思想を掲げて、ブスの逆襲が始まった。この革命が従来の暴力革命と決定的に違うのは、体制の中に入り込み、内側から伝統的な価値観を破壊する文化革命だということだ。(野村編 2006: 3)[22]

上記の文言からは男女共同参画を体制内からの革命であるとして批判する認識が読み取れる。

4.4.2.「一般市民」のフレーム

日本の最高裁判所の上位の裁判機関としての性格を帯びる女性差別撤廃委員会が干渉することは、国際連合憲章第 2 条にある、「国内管轄権内にある事項に干渉する権限を国際連合に与えるものではなく」に反するものであると考えられます。(しーたろう 2009: 第 3 段落)[23]

上記は女性差別撤廃選択議定書批准に反対する請願の文例である。国外ではあるが権力への反発を読み取ることができる。

4.5. 草の根フレーム

運動の参加者を、草の根のアクターとして見なす認識枠組みである。

4.5.1.「広める側」のフレーム

［教育再生タウンミーティングを］勝手連的に計画したが、安倍氏周辺の感触はいい。政権と一体になるのではなく、草の根運動が政権を動かし、教育再生につなげたい（『産経新聞』2006.9.22 朝刊，東京版)[24]

上記は日本教育再生機構の代表である八木秀次の発言である。上記の文言からは草の根運動を求めている認識が読み取れる。

4.5.2.「一般市民」のフレーム

例えば「徳島の保守」というブログ（minoru20000 2010）では、保守系雑誌の『祖国と青年』に掲載された、「祖国と青年」の会の会員による執筆記事を紹介しており、そこでは夫婦別姓に反対する署名を集めた経験が記されている。当該雑誌記事の執筆者はジェンダーフリーも批判しており、自身の活動を国民の草の根運動であるとしている。この例から、保守的な人が自身を草の根市民と見なし、自身の活動を草の根運動と見なしている認識を見ることができる。

5. 考察

以上保守のフェミニズム側に対する批判の認識枠組みとバッシング言説全体における動員の構図を明らかにすることを目的として、バッシング言説を、フレーム分析を用いて分析してきた。そしてバッシングの各アクター間のフレームの共鳴を見ることで、同様の認識枠組みの言説が（おそらく引用しあうことを繰り返すことによって）流布し、バッシングが広まっている様子を見ることができた。

本稿においては、バッシングのアクターを政治家・メディア・有識者等の「広める側」と、それ以外の「一般市民」の２種類に分けて言説を見てきた。これによって、「広める側」と「一般市民」の間で同じ認識枠組みの言説が流布していることが確認できた。このことは、バッシングが保守系の政治家・メディア・有識者等によって広められているというフェミニズム側による分析（若桑 2006）の、言説水準での傍証となるのではないだろうか。バッシングがどのようにして広められているのかをより詳細に明らかにするにはアクター間の影響関係などの分析が必要であり、これは今後更なる解明が望まれる点である。

バッシング言説全体においては「反フェミニズム」という集合行為フレームが掲げられていたが、この他に、反フェミニズムに共鳴する際の詳細な理由として提示される補助的なフレームが５つ見出された。その内保守のフェミニズム側に対する批判の認識枠組みとしては「破壊思想」「共産主義」「理論破綻」の３つのフレームが見られた。これらはそれぞれフェミニズム等に対して「国家や家庭の破壊を目論む革命の思想である」「共産主義である」「理論的に破綻しているもので有効な概念ではない」として批判するという認識枠組みである。これが、保守的な人が「反フェミニズム運動」にコミットする際に提示する認識枠組みの一端であり、ジェンダーバッシングに動員される際の理由の一端であると考えられる。この補助的なフレーム５つの内残り２つの「反権力」「草の根」フレームは、保守運動参加者が自らの側を「権力を用いた上からの革命に反対している」「草の根である」として自己規定する認識枠組みである。

これらの補助的なフレームに関しては、１人の個人がバッシングに動員されるにあたって必ずしも５種類のフレームすべてに共鳴する必要はない。１つだけでも共鳴すればバッシングに動員されるかもしれず、このことがバッシングへの参加理由、そしてひいては参加者を増大させた可能性があるのではないだろうか。これがバッシング言説全体における動員の構図であり、バッシングの広まり方の一端であると考えられる。

この５種類の認識枠組みが、「ジェンダーバッシング」全般においても言えるものなのか、またあるいは保守運動一般においても言えるものなのか、それとも「保守運動としてのジェンダーバッシング」に特有のものであるのかは、この分析のみからでは特定することができない。だが少なくとも、「保守運動としてのジェンダーバッシング」と、そしてそれを見る派生的結果として、「保守運動のジェンダーバッシング部分」について、特徴の一端がわかったということは言えるであろう。

これらの５つの補助的なフレームの相互の関係についてわかっていることを少し記しておくと、「フェミニズムは共産主義であり（それ故）破壊思想である」といった破壊思想フレームと共産主義フレームの相互連関（例えば八木・木村 2002.7: 145 に見られる）、「フェミニズムは理論的に破綻しており（それ故）家庭を破壊する」といった破壊思想フレームと理論破綻フレームの相互連関（例えば林 2005: 3 に見られる）、「フェミニズムは共産主義であり（それ故）理論が破綻している」といった共産主義フレームと理論破綻フレームの相互連関（例えば桜井 2005.11: 330 に見られる）等の認識が見られた。また「草の根である我々（保守）はフェミニストの権力に対抗する」といった反権力フレームと草の根フレームの相互連関も確認されている（Kato 2011）。しかし詳細はまだ明らかにしておらず、これは今後の課題である。

また、アクター間で同様の認識枠組みの言説が流布していることは確認できたが、運動の動きの詳細なメカニズムは解明できておらず、共鳴の論証にもまだ改善の余地がある。そして「広める側」と「一般市民」の間で同様の言説は流布していたが、担い手の特質の差異によって言説の質に微細なずれが存在する可能性はあるので、これも検討の必要がある。更に、「広める側」と「一般市民」に二分して考えたが、「一般市民」も「広める側」に影響を与えているであろうことや、「一般市民」のなかにも、オピニオンリーダー層とあくまで言説を受け入れる側になる層の二層構造があるであろうことは想像に難くないので、この点についてもこれから分析が必要である。

（注）

1　荻上は社会運動を「『クレイム申し立て』によって社会問題を構築し、社会を変革させるための運動」（荻上 2009: 194）と定義し、例えばウェブ上で特定の議題への書き込みが溢れる場合（「祭り」）、「盛り上がるネット世論」といった形を形成できる、と指摘している（荻上 2009: 196）。つまり「祭り」に動員される人の動機や目的が何であったとしても、「盛り上がる」ことで「クレイム申し立て」が行われ社会問題化される、すなわち社会運動が行われる、という説明をしている。また「新しい歴史教科書をつくる会」以降、日本の「新しい保守運動」には「左派叩きの面白さ」という感情的な背景があるとも指摘している（荻上 2009: 202）。

2　発行部数は 2003.10-2004.9 平均で『正論』94,371、『諸君！』83,375（日本雑誌協会調べ）。
3　記事の執筆者について記載された肩書きは「元 TVQ 九州放送北九州本社代表」。
4　山本編（2006）は『世界日報』（統一協会系の新聞）に掲載された記事を再編集して構成されている。引用もとは 2005 年 5 月 20 日付記事、タイトルは「家族破壊のジェンダーフリー思想」、執筆分担者は鴨野守。引用箇所は漫画家さかもと未明のシンポジウムでの発言を報道したもの。
5　記事の執筆者について記載された肩書きは「ジャーナリスト」。
6　記事の執筆者増谷満は「フェミナチを監視する掲示板」の管理人。同掲示板は「『男女共同参画』の名を借りて文化破壊、家族否定の『ジェンダーフリー』政策を推し進めるフェミ・ファシズムを告発し、国民の注意を喚起する BBS」（フェミナチを監視する掲示板 2011）とのことである。筆者の観察した限りでは「一般市民が集う所」といったコンセプトで運営されていると考えられる。増谷は『正論』という大きなメディアに執筆するだけの影響力を保持しているが、彼の論調は同掲示板に集う「一般市民」の声を代弁するという形を取っていると考える。
7　松山市男女共同参画推進条例の運用基本方針として男女の特性の違いへの配慮などを求めた請願が 2007 年 12 月定例市議会で採択された。同会の活動は草の根的であり、またそのウェブページに掲載された発言内容等から判断するに、自らを筆者が定義するところの「一般市民」と規定していると考えられる。政策形成に関して影響力を行使しているが、政治家等に働きかける側であるところから「一般市民」であると判断する。
8　記事は『世界日報』の社説の引用。なおブログの運営主「富士山 2000」については『世界日報』の関係者であるという説もある。ただしここではあくまでも本人が「一般市民」として自称していることを重視し「一般市民によるブログ運営」と見なす。
9　記事の執筆者について記載された肩書きは「東京女子大教授」。
10　記事の執筆者について記載された肩書きは「高崎経済大学助教授」（八木）、「福岡教育連盟事務局長」（木村）。引用箇所は八木の発言。
11　記事の執筆者について記載された肩書きは「ジャーナリスト」。
12　引用ページは掲示板（「フェミナチを監視する掲示板」と推測される）の書き込みを保存したもの。もとの掲示板の書き込み時期は不明だが、筆者は 2007 年末の時点で本ページを観察しているので、それ以前のものである。引用個所発言者のハンドルネームは「小人閑居」。なおウェブサイト「長尾誠夫のＨＯＴＰＡＧＥ」（http://homepage1.nifty.com/1010/index.htm）は 2012 年 1 月 14 日現在リンク切れ。
13　ブログトップに掲載されたブログ紹介によると、「普通に会社勤めし普通に結婚し普通に 2 児の父の 30 代の男のなんの変哲もない日記」（大和の行く末を憂う凡人のブログ 2009）。
14　プロフィール欄によると、「貧乏人の子沢山（3 人）の薬剤師の気ままな日記」（h0512kazu 2011）。
15　引用箇所は八木。脳には性差があることが科学的に証明されており、女性学はその科学的事実を無視している、との旨発言した後の発言。
16　記事の執筆者について記載された肩書きは「元 TVQ 九州放送北九州本社代表」。
17　前書部分（「はじめに――家族を壊すフェミニズム」）から。
18　ブログに掲載されたブログ紹介によると「オールジャンル時事評論」。
19　引用箇所発言者のハンドルネームは「名無しさん　～君の性差～」。ID は「NDuPK5L7」。なおウェブサイト「みみずん検索」（http://mimizun.com/）は掲示板「2 ちゃんねる」（http://2ch.net/）の過去ログ検索サイト。
20　注 7 参照。
21　上野によれば、「新しい歴史教科書をつくる会」神奈川県支部の一メンバーは、「つくる会」本部の運動方針に関して、「壇上から人々を見下ろすのではなく、市民と同じ目線で運動を推進するべき」と述べている（小熊・上野 2003: 113）。これは、権威持つ者が上から運動を指揮・統制するのでなく、「下から」同じ立場で運動を進めるべきと考えている点で、「反権力」に通ずる認識であると言えるのではないだろうか。だが一方で同会の別のメンバーはまた、「左翼／サヨク」に対し、「事実を知ることより『反権力』だけですべてを判断しようとしているのは嫌」（小熊・上野 2003: 156）とも述べている。
22　引用箇所は「INTRODUCTION　ブスの逆襲！」から。野村旗守（ジャーナリスト）執筆。
23　この「『日本解体法案』反対請願」というのは、「日本を解体する法案」に反対してデモを行い、請願書を提出しようという運動である。活動は草の根的であり、またブログ上の文言から自らを「一般市民」と規定していると考えられる。「日本を解体する法案」に含まれるものは、「靖国神社代替施設」「外国人参政権」「偽・人権擁護法案」「二重・三重国籍」「戸籍制度廃止」「夫婦別姓（選択制別姓）」「1000 万移民推進」「日教組教育の復活」等のことである。さまざまな保守的主張の中の一部に「女性差別撤廃選択議定書批准反対」というジェンダーバッシングが含まれていることが分かる。この「請願」については、「扇動社会 2　ネット上 増幅する不信」（『朝日新聞』2010.4.30，第 14 版，34 面）にて取り上げられていた。記事によれば、この請願文例の作成者「しーたろう」は都内在住の女性（氏名・年齢は明かさず）。2009 年の総選挙時にネットで民主党「裏マニフェスト」と称する文書を目にしたのをきっかけに、さまざまな請願書や意見書の文例をつくるようになったとのことである。
24　安倍晋三が政権を担ったときの発言。八木と安倍はフェミニズム側からはジェンダーバッシングのアクターとして見なされている。また日本教育再生機構はホームページに「ジェンダーフリー教育や行き過ぎた性教育の是正・改善へ向けた政策提言」を行うと掲げている（日本教育再生機構 2011）。

（文献）

【亡国】恐怖のフェミニズム / ジェンダーフリー【思想】, 2005,「【亡国】恐怖のフェミニズム / ジェンダーフリー【思想】」，みみずん検索，2005 年 12 月 23 日書き込み，（2012 年 1 月 4 日取得，http://mimizun.com/log/2ch/gender/1112619366/）.

浅井春夫，2006,「性教育・男女平等バッシングの背景と本質――日本の動向・世界の動向・包括的性教育の課題」浅井春夫・子安潤・鶴田敦子・山田綾・吉田和子『ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る――バッシングを超える知の経験』明石

書店，17-56.

Burr, Vivien, 1995, *An introduction to social constructionism*, Routledge（= 1997，田中一彦訳『社会的構築主義への招待——言説分析とは何か』川島書店.）

江原由美子，2007,「ジェンダー・フリー・バッシングとその影響」『年報社会学論集』20: 13-24（特集「保守化」の社会過程を読み解く）.

Faludi, Susan, 1991, *Backlash: The Undeclared War against American Women*, Three Rivers Pr.（= 1994，伊藤由紀子・加藤真樹子訳『バックラッシュ——逆襲される女たち』新潮社.）

フェミナチを監視する掲示板，2012，フェミナチを監視する掲示板，（2012 年 1 月 15 日取得，http://www.azaq-net.com/bbs/bbs.cgi?tani6010）.

富士山 2000, 2011,「女性教育会館／男女共同参画予算に大ナタを」，ぶっ飛ばせジェンダーフリー，2009 年 11 月 13 日，（2010 年 9 月 26 日取得，http://plaza.rakuten.co.jp/hisahito/diary/200911130000/）.

ジェンダーフリーってなんか変！，2012,「ジェンダーフリーってなんか変！」，長尾誠夫のＨＯＴＰＡＧＥ，（2012 年 1 月 14 日，http://homepage1.nifty.com/1010/newpagegg9.htm）.

h0512kazu，2011,「ジェンダーフリー教育」，アズベリー・パークからの挨拶，2005 年 11 月 19 日，（2012 年 1 月 4 日取得，http://blogs.yahoo.co.jp/h0512kazu/17445229.html）.

h0512kazu，2011,「ブログプロフィール」，アズベリー・パークからの挨拶，（2012 年 1 月 4 日取得，http://blogs.yahoo.co.jp/h0512kazu/MYBLOG/profile.html）.

林道義，2002.1,「そんなに家族を壊したいのか——またぞろ出てきた『夫婦別姓』推進派の仰天発言」『正論』353: 274-283.

————，2005.5,「ソフト路線に転じたフェミニズムの新たな罠」『正論』396: 344-353.

————，2005,『家族を蔑む人々——フェミニズムへの理論的批判』PHP 研究所.

海妻径子，2005,「対抗文化としての〈反「フェミナチ」〉——日本における男性の周縁化とバックラッシュ」木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル——バッシング現象を検証する』白澤社，35-53.

Kato, Haruno, 2011, "'We Are the Grass Roots': Grassroots Rhetoric by Conservatives in Gender-Bashing Discourse," *Proceedings 13: Selected Papers*, Ochanomizu University Global COE Program: Science of Human Development for Restructuring the "Gap-Widening Society", 105-112.

健全な男女共同参画社会をめざす会，2007,「請願書 081205」，健全な男女共同参画社会をめざす会ホームページ，（2011 年 12 月 13 日取得，http://www.mezasukai.com/seigansyo081205.php）.

小山エミ・荻上チキ, 2006,「バックラッシュを知るためのキーワード 10」上野千鶴子・宮台真司・斉藤環・小谷真理（他）著，双風舎編集部編『バックラッシュ！——なぜジェンダーフリーは叩かれたのか？』双風舎，154-161.

子安潤，2006,「ジェンダー・バッシングと教育の秩序化批判」浅井春夫・子安潤・鶴田敦子・山田綾・吉田和子『ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る——バッシングを超える知の経験』明石書店，289-314.

増谷満，2004.9,「闘いはこれからだ！ネット言論にみるフェミニストの横暴」『正論』387: 256-265.

minoru20000，2011,「投稿文【夫婦別姓反対署名に取り組んで】」，徳島の保守，2010 年 4 月 16 日，（2011 年 12 月 12 日取得，http://d.hatena.ne.jp/minoru20000/20100416/p1）.

misaki80sw，2005,「ジェンダーフリー考　その 5・・ブレンダと呼ばれた少年」，娘通信♪，2005 年 3 月 17 日，（2012 年 1 月 4 日取得，http://musume80.exblog.jp/1755713/）.

光原正，2005.5,「フェミニズム『世界革命』を阻止せよ！ 第 1 回 過激派操る『国連』に騙された日本の男女共同参画」『正論』396: 326-337.

————，2005.9,「フェミニズム『世界革命』を阻止せよ！ 最終回 男女共同参画——その欺瞞の系譜とレトリック」『正論』401: 250-260.

村井淳志，1997,『歴史認識と授業改革』教育史料出版会.

日本女性学会ジェンダー研究会，2006,『Ｑ＆Ａ 男女共同参画／ジェンダーフリー・バッシング——バックラッシュへの徹底反論』明石書店.

日本教育再生機構，2011,「日本教育再生機構とは」，日本教育再生機構ホームページ，（2011 年 12 月 12 日取得，http://www.kyoiku-saisei.jp/kiko/kiko.html）.

西尾幹二・八木秀次，2005,『新・国民の油断——「ジェンダーフリー」「過激な性教育」が日本を亡ぼす』PHP 研究所.

野宮大志郎編著，2002,『社会運動と文化』ミネルヴァ書房（MINERVA 社会学叢書 18）.

野村旗守編，2006,『男女平等バカ——年間 10 兆円の血税をたれ流す，"男女共同参画"の怖い話！』宝島社（別冊宝島 Real069）.

荻野達史，2002,「ある教育運動の盛衰——共鳴性分析の批判的適用」野宮大志郎編著『社会運動と文化』ミネルヴァ書房（MINERVA 社会学叢書 18），135-168.

荻上チキ，2009,『社会的な身体——振る舞い・運動・お笑い・ゲーム』講談社（講談社現代新書　1998）.

小熊英二・上野陽子，2003,『〈癒し〉のナショナリズム——草の根保守運動の実証研究』慶応義塾大学出版会.

大畑裕嗣，2004,「社会運動とメディア」大畑裕嗣・成元哲・道場親信・樋口直人編『社会運動の社会学』有斐閣，157-171.

桜井裕子，2005.11,「セックス・アニマル育てる性器・性交教育の実態」『正論』403: 320-331.

————，2006.5,「フェミニズムの国家侵食を決定的にした朝日報道」『正論』410: 338-349.

しーたろう，2011,「◆文例◆　女性差別撤廃選択議定書　1」，【日本を】『日本解体法案』反対請願．ｃｏｍ【守ろう】，2009 年 10 月 5 日，（2010 年 9 月 26 日取得，http://sitarou09.blog91.fc2.com/blog-entry-25.html）.

Snow, David A. and Robert Benford, 1988, "Ideology, Frame Resonance, and Participant Mobilization," *International Social Movement Research*, 1: 197-217.

Snow, David. A. et al., 1986, "Frame Alignment Process, Micromobilization, and Movement Participation," *American Sociological Review*, 51: 464-481.

曽良中清司，2004,「社会運動論の回顧と展望」曽良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂，230-258.

鈴木謙介，2006,「ジェンダーフリー・バッシングは擬似問題である」上野千鶴子・宮台真司・斉藤環・小谷真理（他）著，双風舎編集部編『バックラッシュ！——なぜジェンダーフリーは叩かれたのか？』双風舎，121-136.

竹信三恵子，2005,「やっぱりこわい？　ジェンダー・フリー・バッシング」木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル――バッシング現象を検証する』白澤社，19-34.
辻大介，2008,「インターネットにおける『右傾化』現象に関する実証研究　調査結果概要報告書」平成 18 年度（第 33 回）財団法人日本証券奨学財団研究調査助成金報告書，（2012 年 12 月 12 日取得，http://www.d-tsuji.com/paper/r04/report04.pdf）.
若桑みどり, 2006,「バックラッシュの流れ――なぜ『ジェンダー』が狙われるのか」若桑みどり・加藤秀一・皆川満寿美・赤石千衣子編著『「ジェンダー」の危機を超える！――徹底討論！バックラッシュ』青弓社，83-123（青弓社ライブラリー 45）.
八木秀次・木村貴志，2002.7,「教育を考えるシリーズ対談 7 『反人権』教育が子供を救う」『正論』359: 140-151.
山本彰編著，2006,『ここがおかしい「男女共同参画」――暴走する「ジェンダー」と「過激な性教育」』世界日報社.
大和の行く末を憂う凡人のブログ，2009,「ジェンダーフリーファシズム　～共産主義とジェンフリの共通点」，大和の行く末を憂う凡人のブログ，2005 年 11 月 11 日，（2012 年 1 月 4 日取得，http://yamato4u.at.webry.info/200511/article_3.html）.
――――，2009，大和の行く末を憂う凡人のブログ，（2012 年 1 月 4 日取得，http://yamato4u.at.webry.info/）.
吉野耕作，1997,『文化ナショナリズムの社会学――現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会.

Analyzing the Gender-Bashing Discourse from the Perspective of Conservative Movement : Using Frame Analysis

Haruno KATO
(Human Developmental Sciences)

In Japan, objections to a gender-free or a gender-equal society have existed since the latter half of the 1990s. I define "gender bashing" as an objection of this kind, and inquire into the backlash against feminism in Japan. Gender bashing has spread through media discourses, but few studies consider the bashing discourse as a movement. I explore how gender bashing has spread at the discourse level. Further, this paper shows how conservatives criticize feminists and how they are mobilized for gender bashing at the discourse level. I analyze the gender-bashing discourse using frame analysis, which analyzes the relationship between participants' frame and mobilization, focusing on conservative publications (magazines and books) and the new media (Internet websites, blogs, and bulletin board systems) from 1999. I explore each actor's frames and frame resonance, and consider how a similar discourse spread between "propagators" such as politicians, journalists, intellectuals, and "ordinary citizens." Thus, I consider how gender bashing has expanded at the discourse level. I extracted an "anti-feminism" collective action frame in the gender-bashing discourse, as well as assistant frames through which one views things with when she or he is resonant with the anti-feminism frame. There are five assistant frames: the ideology destruction frame, communism frame, broken theory frame, anti-power frame, and grassroots frame. The ideology destruction frame involves the perception that feminism is a revolutionary ideology that intends to destroy the state or the family. The communism frame is involves the perception that feminism is communism. The broken theory frame is involves the perception that feminism is not an effective concept because its bases of doctrines or theories do not hold. Conservatives also identify themselves as a "resisting power" or "grassroots" when they are resonant with the anti-feminism frame. These frames are factors that contribute to resonance with the anti-feminism frame. When one is mobilized for bashing, he or she is not necessarily resonant with five frames at a time. One could be mobilized for bashing if she or he is resonant with only one of these five frames. This might increase the reasons for participating in bashing, and the number of participants, too. This is one of the reasons that gender bashing has expanded.

Keywords: gender bashing, conservative movement, frame analysis, discourse, resonance